

少女アンは夢を持つことの すばらしさを教えてくれる

一八七四年十一月三十日、カナダ東部プリンス・エドワード島で、ルーシー・モード・モンゴメリーは誕生した。モンゴメリーという名を耳にして、どんな人？と首をひねった人でも、『赤毛のアン』の作者といえは分かってもらえることだろう。

彼女は一九〇八年第一作の『赤毛のアン』（緑の切妻屋根のアン（アン・オブ・グリーン・ゲイブルス））を出版したが、好評をもって迎えられ、ベストセラー作家となった。カナダばかりでなく、アメリカ、イギリス、オーストラリアでも評判となり、ファンレターが殺到した。その中にはマーク・トウェインからのものもあったという。以後一九三九年の『炉辺荘（イングルサイド）のアン』まで八冊のアン・シリーズ（一八七〇年代から第一次大戦時までの物語）を発表した。

わが国でも昭和二十年代に村岡花子が翻訳して以来、数十年にわたって多数の少女の心を引きつけ、共感を得てきた。百年前の物語が今なお愛されているのは、夢を持って生きることのすばらしさが書き込まれているからである。そこに大人をも引き込んでやまない魅力があるのだ。



また、このシリーズには料理や手芸などのシーンがしばしば出てくるため、アンをテーマにした手作りの本が各種出版されている。

その手の本の一冊に、プリンス・エドワード島在住のテリー神川の料理・文『赤毛のアン』のお料理BOOKがある。お菓子が中心だが、肉料理もいくつか紹介されている。そのなかにマリラがアラン牧師夫妻を招いたときのメニューにコールドタンがある。物語は七月という設定なので、軟らかく煮込んだ牛タンにデイル（アネット）ソースをかけただけの単純な料理だが、暑いさなか、デイルのさわやかな香りが食欲をそそるといふ、こまやかな心づかいを見せている。